

---

# 居候日記

ガラスの靴

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

居候日記

### 【Nコード】

N9770D

### 【作者名】

ガラスの靴

### 【あらすじ】

今、私の目の前には1人の男の子が横たわっている。……なんでやねん。ある大学生とある高校生のあんまり普通じゃない出会いです。短編読切。

## （前書き）

この小説は短編小説です。

ですが、緻密なプロット設定などはなされていません。

そのため、非常に展開の面白みに欠ける出来となっております。  
それでも構わないという方のみこの先へお進みください。

訳が分からない。

今、私の目の前には1人の男の子が横になっている。

ちなみに私には生まれてこのかた彼氏などというロマンティックな響きをもった異性などおらず、彼氏でもない男を自宅である2階建てアパートの1室に招待するような神経はしていない。

よってこの状況は私の意志を無視して進んでいるということになる。

なぜこんなことになったのか、私は記憶を1時間前まで遡らせることにした。

「瑞穂、あんた本当にこのままでいいの？」

「何が」

大学の授業が終わり、サークルに入っていない私はすぐにバイトへ向かおうとした。そこに旧友の邪魔が入る。

「だーかーらー！ そんな青春をドブに捨てるような生活でいいのかってこと！」

「ああ、そんなこと」

確かに、大学の授業とバイトの他に若者の遊びはあんまり、というか殆どしたことがない。サークルもカラオケもなし。合コンなんて彼岸の世界だ。

「そんなじゃねえ！ いつかどこかに就職して、出世とかは出来ても、『瑞穂さんて仕事しか考えてないよね』とか言われていつまでたっても彼氏が出来なかったりするのよ！」

そんなもん知るか。

「バイトしないと学費払えないんだから仕方がないでしょ。だいたバイトだって青春らしいし」

「甘ぁーい！！　今どきバイトなんかで彼氏が見つかると思うな！　そういうところで見つきたい男つてのは大抵ろくでなしか誰かのツバがかかっているのよ！」

「はいはい。それじゃああんたは青春を満喫してなさい。私はバイトする」

「ああ！　ちよつとお！？」

後ろでぎゃーぎゃー騒ぐ旧友をほったらかして大学を出る。今日は少し時間に余裕があるから一旦家に帰って着がえようか。

春が来たといっても、やっぱり寒い日は寒く、今日なんかは冬の再来とまで言われる気温だった。出来ることなら今すぐ温かいお風呂に入って寝たいところだが、そんなことをするわけにはいかない。「……ん？」

私が一人暮らしをしているアパートの近くに来ると、知らない人がアパートに入っていこうとしていた。

「……誰か新しく入ったのかな」

ここは田舎のおばあちゃんたちが住むところではないのだ。付近住民の入れ替わりなんていちいち気にしてられない。帽子のせいで顔もよく見えなかったし、もしかしたら知っている人だったかもしれない。

「さーで、とりあえずこたつであつたまるかー」

ポケットから鍵を出しながら2階にある私の部屋まで行く途中、そんなことを思う。我が家の年中無休フル稼働なこたつはこの前大家さんが捨てようとしていたのを貰ったもので、見かけは少々ぼろいが一応の働きを見せている。

階段を上りきると、さつき入り口で見かけた男が私の部屋のすぐ前に立っていた。

「あれ？　私に用事？」

男は落ち着かない様子だったが、2、3回深呼吸ををすると思い切

った様子でノブに手をかけた。そのまま回すとすんなり開いた。

「ちょちょちよつと、あんたなにやってんの!？」

「え!？」

鍵が開いてたからって、いくらなんでもノックくらいしろ。私が近づくと、男は焦った様子であちこち見回した。

「私に用事? だったら用件くらい聞くけど」

「い、いえ! なんでもありません! 失礼しま」

ドスン。

落ちた。

「……は？」

下を覗き込むと、男がうつぶせに倒れていた。どうやらぶつかった手すりが老朽化の影響でとれてしまったらしい。

「……なんなのよ、もう」

大家さんのところに行っても誰もいなかったし、このまま放っておくと落っこちた手すりとかの関係でいずれ私の部屋に用事があったとばれそうだ。仕方なく男のところへ降りていく。

「もしもーし、生きてる？」

「……」

「……返事がない。ただの屍のようだ。」

「じゃなくて」

住んでる人なら楽なのになーと思いながら帽子を取る。

「……誰これ」

それは男の子だった。

体格的にはたぶん高校生くらいだろう。なかなか可愛い顔をしている。

だが残念ながら可愛い顔をしていれば問題が解決するわけではない。

「……どうしよう……」

私は、ひとまずその男の子を引きずって部屋に運び込むことにした。

「……うーむ……」

振り返るのは最後の10分間でよかったなと思いながら、自分のとった行動を反省する。

「なんで部屋に入れちゃったんだろ……」

要はこの男の子と私の住むアパートとの関連性をなくせばよかったのだ。

例えば道路のすみにもポイと放り出してしまえば、手すりの落下はただの老朽化ということで処理されていただろう。

「私、完全犯罪向いてないのかも」

自分の犯罪適性を分析していても意味がない。ひとまず今の計画を実行に移してみよう。

「……う、ううん……」

「あ、起きた」

ついでに言えば運もなかったようだ。

「……あ、あれ……？　ここは……？」

「私の部屋よ。あんた前でウロウロしてたじゃない」

「……え？　そ、それじゃここは、あなたの部屋？」

さっきそう言った。

「あ、あ、あの！　失礼しました！　って、うわぁ!？」

男の子は慌てて飛び上がると、すぐさま逃げ出そうとした。足をかけて転ばせ、動きを封じてから尋ねる。

「まあ待ちなさい。なんで私の部屋の前で不審な動きをしていたのか説明するのが先よ」

「え、い、いえ、その……!」

最近盗聴やら盗撮やら個人情報漏洩やらで安心して一人暮らしも出来ない。らしい。

「まさかあんた、空き巣？」

「……す、すみませんでした!」

……うそ。

「え？ まさか本当に？」

「……お金がなくて……」

面倒なことになった。私の部屋に空き巣が入ろうとしたのも気持ちが悪いが、これから警察になんていったら色々と事情を聞かれて今日のバイトに遅れる事は必至だ。

「……はあ……」

「ご、ごめんなさい。その、僕、鍵を開けたり出来ないの、ドアノブを回して開いていたら中に入ろうと思っていたんですけど……」

「はあ……？」

どうやらとんだ間抜け泥棒だったらしい。いやまて、それに空き巣に入られそうになった私はもつと間抜けなのか？

「なんで私の部屋なのよ」

「いえ、その、適当にその辺の家を回ってました……」

「どのくらい」

「4軒くらい……」

つまり少なくともその4軒は鍵が閉まっていたわけか。防犯意識がしっかりしていていいことだ。

「それで、私の部屋が開いて、だけど私が来た、ってこと……」

どれだけ偶然が重なればこんなことになるのやら。

「あの！ 本当にごめんなさい！ 僕、何でもします！ だからどうか警察には言わないで下さい！」

私も出来ればそうしたい。

「警察にいったところで未遂に終わりそうだしね……」

「そ、それでも警察はダメなんです……」

まさか脱獄犯とかじゃないだろうな。

「警察に行ったら……叔父さんが……」

「おじ？」

叔父さんが警視総監とか？

「とにかくお願いします！ どうか警察には！ お願いします！」



「わ、わかったわよ。言わなきゃいいんでしょ言わなきゃ」  
「……あ、あ、ありがとう……」  
「ちよ、ちよっと！　なんで泣くのよ！？」  
「すみません……安心したら……その……」  
「なんなのよ、もう。」

「もう大丈夫です……。落ち着きました」  
「そう。じゃあ帰れ」

「なんで空き巣と我が家で和まなければいけないのだ。」

「あ、そうですね。それじゃ、本当にありがとうございました」  
「私もバイトに行くため部屋の外へ出る。」

「せっかく見逃してやったんだから、もうやるんじゃないわよ」

「……はい。わかりました」

男の子はぺこぺこ頭を下げながら帰っていった。私もとんだお人よしだ。

「それにしても、叔父さんがどうしたんだろ」

少し気になるが、それよりもバイトだ。遅刻する。

バイトも終わり、家に向かって歩いていく。安全を考えたらバスを使うべきだろうが、どうせ徒歩と10分くらいしか変わらないのだ。210円と天秤にかけたら歩く労力が勝る。

「寒い……」

夜。そして風。この極悪コンボは容赦なく人の体温を奪っていく。やっぱりバスでも良かったかもしれない。

「……………！！」

夜は遠くの音がよく聞こえるようになるらしい。そして聞こえてしまったものはしょうがない。

「今日は厄日か……！？」

叫び声のする方向まで行くと、どうやら不良グループがカツアゲをしているようだ。叫ばせるなんて詰め甘い。

「ちよっと、なにしてんの」

「あ？ いや、お小遣いを借りてんだよ」

「お姉さんも貸してくれないかなあ？」

バカの一つ覚えのように金々言う不良グループに携帯電話を見せる。

「110、押しといたから」

「な……！」

「余計な真似しやがって！」

国家権力の犬にも勝てないばかり者が負け犬の遠吠えを聞かせながら逃げていく。

「それだけで逃げるあんたらはどうなのよ……」

最近の若者はだらしが無い。どうせやるならもっと気合入れてカツアゲしろ。

「で、被害者は……」

前言撤回。カツアゲではなかったようだ。

「これじゃ強奪じゃない……」

その人は殴られ蹴られ、見るも無残な姿になっていた。慌てて起こす。

「……あんた……」

「……あれ……？ どうしたんですか……？」

つくづく不運な男の子だった。

「それで、悲鳴を訊いて駆けつけたら、あの少年が倒れていたと？」

「ええ。他には誰もいませんでした」

面倒くさい。

とりあえず救急車でも呼ばうかと思ったら、どこかの愚か者が悲鳴を聞いて警察を呼んでいたらしく、私も強制連行の目にあった。

「ふうん……ホントにあんたがやったわけじゃないんだな？」

「しつこいですね。私のような弱い女性になにができるっていうんです？」

「……………」

あ、ドン引きしてる。せめて突っ込め。

「……ゴホン。わかった。それじゃもう帰んなさい」

「あの、あの子は？」

別の部屋で事情を聞かされていると思うのだが。

「ああ、あの少年か。彼は搜索願が出されていたから、これから保護者に引き取ってもらうよ」

「……え……？」

搜索願？

「あの、それってどういう……！？」

「あんたには関係ないでしょ。さあ帰った帰った」

「いや、あの、ちょっと」

「大変です署長！ 少年が逃げ出しました！」

「……な、なんだとう……！」

この人、署長なんだ。いやそんなことはどうでもいい。

「それじゃ帰りますね。お世話になりました、無駄に」

「あ、ちよつとあんた……！ 待ち」

なんとなく早足でアパートへと向かう。

「まさかとは思うけど……」

大学から電車で30分。さらにそこから徒歩で20分。ようやく見つけた激安アパート、その203号室。

その部屋の前に、あいつはいた。

「……訴えるわよ？」

「……ごめんなさい……」

謝るくらいなら警察はいらないっての。

「とにかく逃げなきゃって思っで、それで、がむしゃらに走っで……気がついたら、ここに来てました……」

「私の家はあるたの避難所じゃないんだけど」

「ごめんなさい……」

とりあえずいつまでもこんな寒空の下じゃ凍えてしまふ。私は部屋に入るついでに男の子を入れてやった。ついでに。ここ重要。

「あんた、家出か何か？」

「え？」

「搜索願が出てるつてのに、逃げ出すなんて。家出じゃなかったらただのバカね」

「……すみません……」

だから謝るな。

しばらくの間、お互い無言で座る。

「……あの、あなたは一人暮らしなんですか？」

「そうよ。悪い？」

「……ご家族の方は……？」

「……」

普段なら絶対に答えない質問。

訊いてきた奴とは暫く口もききたくなるほど嫌なその質問に、今の私はどうしてか素直に答えたくなった。

「逃げてきたのよ」

「……え……？」

「逃げてきたの。名家だかなんだか知らないけど、生まれたときから将来が決められてるような家なんてうんざり。だから、高校卒業と同時に飛び出してきたの」

我ながら子供じみてると思う。

そんなことをするから余計話がこじれるのもわかってる。けど、そうなってしまったからにはしょうがない。

「それで半年とちよつと、うまくやれてるからいいけどね」

「うまく……ですか？」

男の子が部屋を見回しながら言う。

「……なんか文句ある？」

「い、いえ！？ なんでもありません！」

部屋が散らかってて悪かったわね。

「……そのご家族の方は、心配してないんですか？」

「知らないわよ。どう調べたのか知らないけど手紙なんて送りつけてくるわりに迎えにも来ないんだから、どうでもいいんじゃない？」

「……そう、なんですか……」

再び静寂。

「……僕の親は、小さい頃に死んでしまいました」

「……え？」

「それで、叔父さんの家に引き取られたんです」

叔父さん。

その響きだけが、何故か冷たく感じられた。

「そこでの生活は……まあ、楽しくなかったわけじゃないんです。友達も何人かいましたし」

そこから先の話は、テレビなんかでよく聞くものだった。

家庭内暴力。

虐待。

育児放棄。

「……まあ、育児なんて歳じゃないですけど」

ハハッ、と悲しそうに笑うその横顔は、とても寂しげで。

「……それで、逃げ出してきたの？」

否定しないその表情が、全てを物語っていた。

「それにしてもあんた、どこから来たの？」

「え？ 青森ですけど」

「……は？」

いま、青森とおっしゃったか。

「……ここがどこだかわかってる？」

「東京ですよ」

「……………」

「確かに、ちよつと遠くまで来ちゃいましたね  
今すぐ『ちよつと』の意味を辞書で引け。」

「まったく、そんなんじゃ泊まるところ探すのも大変でしょ」

「……はい……。おかげで公園の皆さんと仲良く出来ました……」  
「じゃ、また会いましょ」

「ああ！？ そんなあからさまに追い出そうとしないでください！  
いやなんか、イメージ的に臭い。」

「だ、大丈夫です！ きちんと体は洗ってます！」  
「……そんなこと改めて言わなくていいから。」

「わかったわよ」  
「はい？」

もうここまで来たら何かの力が働いているとしか思えない。

「泊まるところがないんなら、今晚だけは泊めてあげる」

「……え、あの……」

「……何？ あてがあるなら今すぐ追い出すけど」

「いえ！ あの、お気持ちはすごく嬉しいんですが……その、大丈夫  
なんですか？」

普通そつちから訊くか。

「まああんた弱そうだし。柱に括り付けとくし」

「……そうですか……」  
嘘だつて。

「まああんたの気持ちも分からなくもないし。同じ家出仲間のよし  
みよ」

「……あの、あなた」  
「瑞穂」

「……え？」

不思議そうな顔をして見上げる男の子。

「名前。あんたは？」

「え？ ……えっと、優希ゆうきっていいいます」

女の子でもいけそうな名前だ。

「……それで、あの……」

「何よ、まだなんかある」

「瑞穂さん、ありがとう……っ、っ、っ……!」

「だー! 泣くなというに!」

「は、はい……っ、すみま……っ」

「もういいっての……」

「あ、あのっ!」

優希は後ろを向いてグシグシと目をこすると、こちらへ振り返った。

「ありがとうございます!」

「……っ!」

「本当にこのご恩は一生忘れません!」

「……や……」

「や?」

「やかましいい!」

「ええええええ!」

優希を殴り飛ばして洗面所へ駆け込み、ドアを思い切り閉めた。

「はあ……はあ……!」

あれはない。

「……反則でしょ……」

ああいうのは好みじゃないって思ってたけど。

なんというかその、笑顔が。

「眩しすぎる……」

もうダメだ、自分。

ジリリリリリリ……!

「……眠い」

結局夜中はほとんど眠れなかった。





駄目だ、勝てない。

私はこの時、これから続く生活が長い長いものになるんだと確信した。

「ほら瑞穂さん、早く食べましょう!」

（後書き）

初めての方は初めまして。

そうでない方はお久しぶりです。

ガラスの靴でございます。

この話は個人的事情で課題の作成に追われている中、「やってられるか」と半ば自棄になって書いたものです。そのためなかなか突っ込みどころ満載。

あえて自分から突っ込むと、単に厄神様の逆バージョンといえなくもないお話ですね。

ですが、この世界には幽霊とか神様とか妖怪とかはいないようだったりするかもしれません。

今回の話は読み切りとして書いたので続きは特に予定していませんが、どうしようかと思っているうちに脳内の登場人物が増えてしまったのでまた気が向いた時に続きができているかもしれません。できていないかもしれません。

というわけで、いかがだったでしょうか？

感想など送っていただけると作者が小躍りするので、そういう反応を見て愉しみたい方なんかも感想を書いてみるといいのではないのでしょうか。

ではでは、読んでいただきありがとうございましたー！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9770d/>

---

居候日記

2010年10月8日15時21分発行